東農大オホーツクキャンパス

生物産業学部の水産資源管理学研究室

アザラシの行動研究

学生が大学のとっておきの情報やスポーツを紹介する「Monthyキャンパス」は、東農大オホーツクキャンパスで学ぶ加藤美緒さん（4年）が、在籍する生物産業学部の「水産資源管理学研究室」を紹介。また、「スポーツ観戦記」は、法大・スポーツ法政新聞会の奥石錬さん（2年）がラグビートップリーグ、NECーサニックス戦をリポートします。

大学のホント

第一人者小林講師に加藤美緒さんが聞く

地球温暖化や野生動物の個体数増加による生態系への影響は、陸上では人の目に触れることが多いが、海の中では見えにくい。海の生態系の変化を見るためには、海の高次捕食者であるクジラやアザラシなどの海生哺乳（ほにゅう）類を指標にする。

東農大生物産業学部アクアバイオ学科の小林万里先生は、北海道近海に生息するアザラシを、海洋生態系のモニタリング種となるのではないかと考えた。クジラほど広域回遊をせず、南限が北海道に位置し、地球温暖化の影響を受けやすい流氷に物理的にも依存しているという理由からだ。

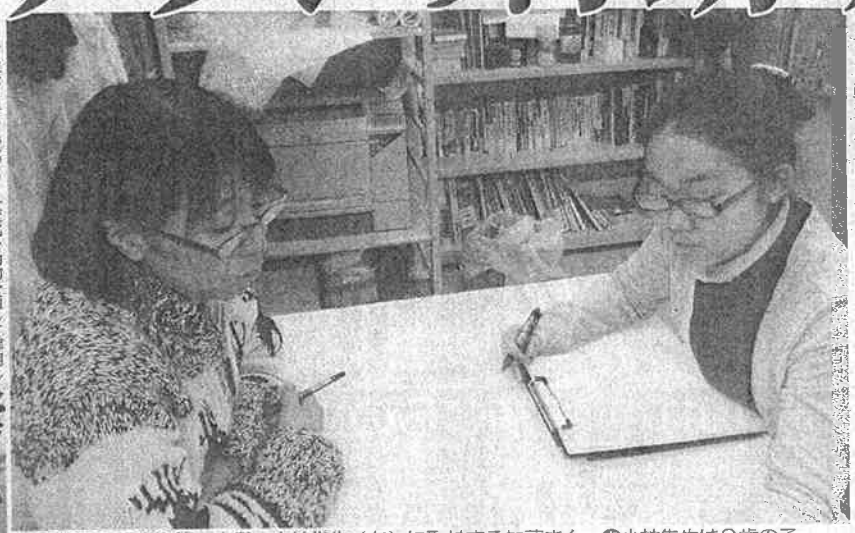
現在、北海道での野外調査（フィールドワーク）を中心として、アザラシの生態研究を行っている。アザラシといえば水族館の人気動物であり、多摩川へ迷い込んで話題になった「タマちゃん」などが記憶に新しい。ポピュラーな動物のように思われるが、その生態についてはあまりよく分かっていない。

そこで小林先生は、アザラシに発信機を取り付けて回遊ルートなどを追跡、北海道に来遊してくるアザラシの生態に関する研究を進めている。その結果、個体数の増加や流氷の減少により、生態変化が起こっていることが解明された。一方でアザラシの個体数増加によって起きている漁業被害など問題についても研究している。

小林先生は「人とコミュニケーションを取ることが大好き」と話す。フィールドワークは野生動物を相手にするだけでなく、聞き取り調査など人とのかかわりが重要だ。冬の北海道で行う野生動物の調査は寒さと孤独との戦いだが、そのような過酷な調査でも楽しいという。動物好きで、人間好きだということが伝わってくる。

アザラシ研究の第一人者である小林先生は、2歳の子供のお母さんでもある。酒豪としても有名で、子育てと研究との両立、毎日の晩酌や飲み会参加など、その活動的な姿は、学生からは頼もしく見える。もちろん子供への目線も、学生への目線も分けへだてなく同じだ。学生からも人気があるという。親子ともどもたくましく、充実した毎日を送っているようだ。

【東農大・加藤美緒】



アザラシ研究の第一人者、小林先生（左）に取材する加藤さん　実小林先生は2歳の子どもの母親でもある

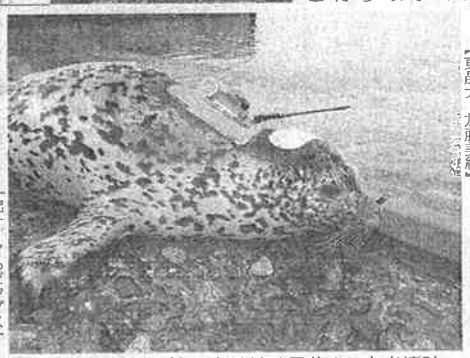
◆小林万里（こばやし・まり）1968年（昭43）9月26日、米ニューヨーク州生まれ。野生動物の研究のため、北海道へ移住。北大獣医学部卒業、博士論文では海亀（タイマイ）を対象として研究。海洋環境の変化を動物を通して解明したいと考え、アザラシを対象に研究に従事している。主な著書に「日本の哺乳類」や「北海道の海生哺乳類管理」などがある。生物産業学部「水産資源管理学研究室」講師。

野生のアザラシを捕獲し、生態研究をする小林先生（左）と学生たち

ここでしか学べないことがある

◆東農大オホーツクキャンパス　北海道網走市にあるオホーツクキャンパスは、吸い込まれそうな広い空や、地平線にゆっくりと沈む夕日を見慣れてしまうというぜいたくな環境にある。世界自然遺産の知床も目と鼻の先にある。都会ではお金をかえばたいていのものは手に入るが、自然にあるというぜいたくは手に入らない。

自然が豊かということは、すなわち生物資源が豊富であるということ。北海道産のおいしい食材が毎日食卓に並ぶのは、スーパーで安く簡単に手に入るからだけではない。東農大オホーツクキャンパスの学生は、農家バイトやホタテバイトといったアルバイトを成長し、たくましくなる。都心の大学ではありえない「自動車通学」で行動範囲は拡大、授業が終わったら夏はのんびりドライブ、冬はスキーなどを楽しめる。市街へも至近距離で、年間を通して学生生活の楽しみは事欠かない。活動範囲も研究テーマもビッグスケールでここでしか学べないことがオホーツクにはある。



アザラシに発信機を取り付け回遊ルートを追跡

◆東京農業大　東京都世田谷区桜丘1の1の1。大沢貫寿学長。1891年創立。創設者は幕臣でありながら明治政府で活躍した榎本武揚（初代逓信相）。世田谷、厚木、オホーツクの3キャンパスに短期大学部も含めて6学部21学科と大学院2研究科を持つ私立大学。

1989年に開設されたオホーツクキャンパス（北海道網走市八坂196）には生物産業学部生物生産学科「アクアバイオ学科」食品科学科「産業経営学科」と、大学院生物産業学研究科（博士前期・後期課程）がある。大学の伝統である「応援団」や「大根踊り」もオホーツクキャンパス開設と同時にカーリング部、競技スキー部や硬式野球部、陸上ホッケー部は全国レベル。

面白さあらためて

【編集後記】私は現在、北海道沿岸に来遊してくるゴマフアザラシについて研究しています。今回指導いただいている小林先生にお話を聞いて、アザラシ研究をすることの大変さ、そして面白さをあらためて感じました。北極の氷がどんどん溶けているように、気候変動の影響は極域で顕著に見られています。ゴマフアザラシはその極域近くまで回遊しているため、気候変動の影響を少なからず受けているのではないかと考えています。

今後大学院に進学して今の研究を続ける上で、アザラシだけでなく、アザラシを取り巻く環境や海洋生態系、人間活動への影響などもっと広い視野を持って研究に取り組みたいと思っています。

◆加藤美緒（かとう・みお）1987年（昭62）11月10日、東京都生まれ。極域の、しかも水中という特殊な環境下にすむ哺乳類に興味を持ち、水産資源管理学研究室に所属。現在、小林先生指導の下、北海道日本海側に来遊してくるゴマフアザラシに関する研究をしている。生物産業学部アクアバイオ学科4年。